

# 農 林 水 産 大 臣 賞 受 賞

果報ぬ島の伝統文化とさとうきびでシマおこし

受賞者 たけとみちよう こはま 竹富町小浜集落

やえやまぐん たけとみちよう  
(沖縄県八重山郡竹富町)

## ■ 地域の沿革と概要

日本最南端に位置する竹富町は、点在する16の島々から成る島しょの町である。有人島は竹富島、西表島、小浜島、黒島、波照間島などの9島、面積は有人島・無人島合計334km<sup>2</sup>と県内で最大面積を誇る。人口は3,859人で2,000世帯(平成22年国勢調査)となっている。

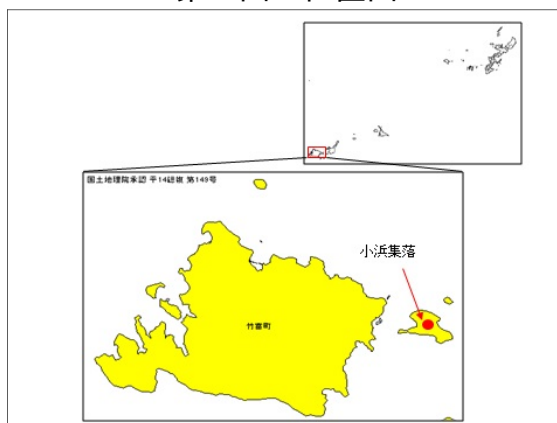
平成22年国勢調査における産業別就業構造(15歳以上)を見ると、総数2,268人のうち第1次産業就業者数は407人で17.9%を占め、第2次産業は150人で6.6%、第3次産業は1,574人で69.4%となっている。第1次産業は農業が主として行われており、さとうきび、水稻、果樹(パインアップル、マンゴー他)、畜産が主要品目である。

小浜島は、八重山諸島のほぼ中央に位置し、小浜集落と細崎集落の2つの集落で構成されている。

島の周囲16.6km、面積7.84km<sup>2</sup>で、面積は竹富町全体の2.5%にあたり、西表島、波照間島、黒島に次いで4番目の広さとなる。島の人口は、終戦直後に過去最高の1,271人を記録してから徐々に人口が減少し、昭和47年の復帰年には479人、昭和52年には405人にまで減少したが、その後、平成14年には500人をを超えるなど上昇に転じた。

島別に町の人口・世帯数の推移を見ると、増加傾向にあるのは西表島と小浜島となっている。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	集落の集合体
地区の性格	地縁的な集団
農 家 率 (内訳)	12.5%
	総世帯数 297戸
	総農家数 37戸
専兼別農家数 (内訳)	専業農家 19戸
	1種兼業農家 6戸
	2種兼業農家 12戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 784ha
	耕地面積 111ha
	田 2ha
	畑 82ha
	耕地率 14.1%
	農家一戸当たり耕地面積 3.0ha

注：総農家数は、販売農家数の合計となっている。

## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

小浜島は「果報ぬ島」(幸せの島)と呼ばれるほど土壌や水利に恵まれた農業中心の島であり、小浜節や結願祭に代表される古くからの伝統文化が色濃く残っている。かつては稲作が盛んであったが、現在の農業の中心はさとうきび作で、含みつ製糖工場も設置されている他、畜産業も盛んである。



写真1 むらづくりの中心 小浜公民館

沖縄県におけるアイランドリゾートは小浜島から始まっており、島内には本土資本によるリゾート施設やゴルフ場が立地している他、平成13年には、NHK朝の連続テレビ小説「ちゅらさん」が放映され、そのロケ地として全国的に知名度も高まった。

沖縄県内でもリゾート開発の発展と共に多くの伝統文化が姿を消してきたが、小浜集落では多くの古式豊かな伝統文化が絶えることなく豊富に残っており、親から子へ、子から孫へと何百年にわたって集落の人々によって継承されるなど、伝統文化がくらしの中に根付いている。

### 2. むらづくりの基本的特徴

#### (1) むらづくりの動機、背景

##### ア 人口流出を防ぐ農業と観光をリンクしたむらづくり

小浜島の人口は、昭和40年代に入ると、高度成長期のあおりを受け、若者は仕事を求めて島外へ流出し、減少の一途であった。さらに、島の中心産業であるさとうきび農業が、長期の干ばつ、大型台風の襲来で甚大な被害を受け、出稼ぎ収入に頼らざるを得なくなったこともあり、多くの住民が島を離れ、人口は激減した。

小浜島は、農業を中心に暮らしを立て、農業にまつわる伝統行事が大切にされていたが、その主力となる若者の島外流出が続いていけば、大切な伝統行事の存続にも影響し、集落自体の維持にも関わってくるなど、人口の減少は住民にとって重大な課題であった。

生産年齢人口の流出により、さとうきび生産量の減少、それに伴う製糖工場閉鎖による経済危機に直面した住民は、これらの諸課題に対して、集落内の運営組織である公民館を中心として、住民主導による話し合いにより解決を図り、独自の伝統文化を固守しながら観光産業を受け入れ、さとうきび農業の再生と観光産業と農村との交流など、新たな活動に住民が一丸となって取り組んできた。

## イ 度重なる糖業危機は話合いで乗り越える住民パワー

小浜島では、さとうきびは明治中期から栽培されており、昭和39年期には約11,000 tの収穫があったが、昭和46年、長期の干ばつと台風により壊滅的な打撃を受け、生産量は激減し、施設が半壊するなど製糖工場が操業中止に追い込まれた。

当時の公民館長は、何としても工場再建を果たしたいと覚悟を決め、住民の総意を取りまとめ、住民が製糖工場を買い取って工場を運営していくことを決議し、島内の住民あげて取り組んだ。この結果、町の補助を受けながらも工場を買い取り、新工場を立ち上げることに成功し、ここに住民の住民による住民のための製糖工場が県内で始めて誕生した。新工場の名前は小浜<sup>こはま</sup>節にちなみ「照島糖業株式会社」と命名された（昭和63年から「小浜糖業株式会社」に変更）。

照島糖業は、株主である住民から社長と役員が就任して操業が開始されたが、平成2年ごろから徐々に収穫面積が減少し、生産量も低迷して、平成22年に再び工場閉鎖の危機に立たされた。この危機に際しても、住民一丸となって存続活動に取り組んだ結果、県の補助事業も活用し、竹富町が事業主体となり、その運営をJAが行う含みつ糖工場が平成24年から再スタートすることになった。



写真2 平成24年に再スタートした製糖工場

## ウ 住民主導のリゾート誘致と農業と観光業の共存共栄

小浜製糖工場が解散する危機に面していた昭和47年頃、本土企業が八重山諸島で大型観光事業に着手しようとしていた。集落にとって大きな課題となったリゾート誘致に当たっても、住民主導による課題解決に向けて取り組むこととなり、土地を売ってはいけないなど激しい意見がぶつかり合う中で何度も話し合いを重ねた結果、昭和48年、若者の流出を防ぐには農業以外に働く場が必要との意見が大勢を占め、誘致を受け入れることになった。

誘致受入れの際は、集落と企業とで十分に話し合い、「地域から優先して雇用すること」、「農水産物は地元から調達すること」などを記した協定書を交わすなど、単なる土地の売却ではなく、伝統文化を重んじる小浜集落の特性に配慮した形でリゾート施設の建設が進められ、昭和54年に住民の意向を反映させたリゾート施設「はいむるぶし」が開業した。

リゾートで働く従業員は、結願祭などの伝統行事に演じ手として参加しており、今では彼らの協力は欠かせないものとなっている。一方、集

落側からも、年末年始に小浜青年会がホテルで観光客に伝統芸能を披露したり、集落の子ども達が獅子舞を披露して観光客をもてなすなど、お互いの交流も行われており、集落とリゾートとは一定の距離を保ちながら共存共栄し、観光と農業の交流にも寄与している。

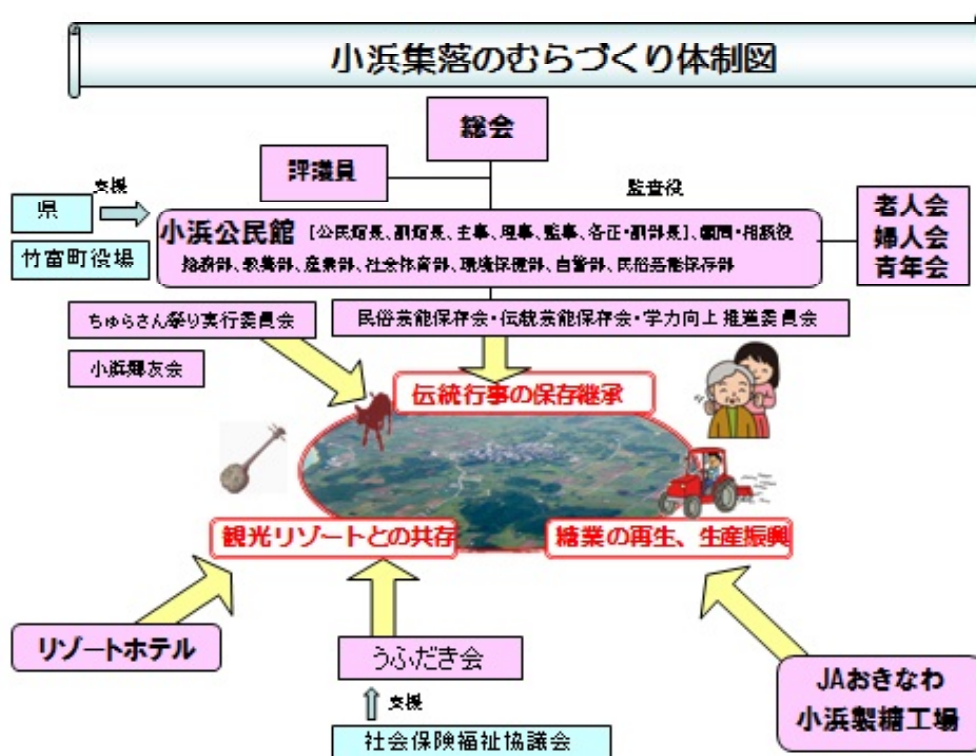
## (2) むらづくりの推進体制

公民館は、小浜集落の住民にとって集落の運営における中心的組織であり、住民は気軽に公民館に集まる。解決すべき課題があるときには公民館で話し合いを行うなど、住民にとっては合意形成の場として重要な役割を担っている。

特に公民館長は、集落における中心的存在であり、竹富町役場からの行政上の業務は、公民館長を通じて行われるだけでなく、住民からの要望も、公民館長からの要請として行政へ伝えられたり、時には公民館役員とともに直接役場へ出向いて要請を行ったりするなど、行政機関とも連携が強く、集落運営に欠かせない存在である。

小浜集落では、小さい頃から「キムピティツ」(心一つ)ということを教えられ、公民館活動に対しても住民みんなで参加し、協力して取り組んでいる。

第2図 むらづくり推進体制図



## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

小浜集落は古くからの伝統文化が色濃く残っており、これらの伝統行事の継承を通じて、醸成された島への愛着感により生まれたコミュニティの強さによるむらづくりが推進されている。

伝統文化は、集落の人々の暮らしに根付いており、伝統文化を継承することで培われた人の輪、社会の輪によるコミュニティづくりを通じ、集落運営の中心である小浜公民館を中心として集落一致団結して取り組むことが、小浜集落におけるむらづくり活動推進の根本となっている。

こうしたむらづくり活動の推進により、さとうきびを中心とした農業の再生などの多くの危機を乗り越え、解決してきたという取組の結果は、集落の人々にとっても誇りとなっている。



写真3 小浜集落の伝統的な祭り結願祭

### 2. 農業生産面における特徴

#### (1) さとうきび生産

小浜集落におけるさとうきびの生産は、近年減少を続け、黒糖の販売不振や台風の被害等から、平成23年には2,000 tを大きく割り込んでいたが、平成24年からは製糖工場が新しくなったことを契機に団塊世代のUターン帰農が増え、生産量5,000 t達成に向け、集落をあげた取組が進められている。

さとうきび生産農家の平均年齢は63歳(平成22年時点)と高いが、近年、団塊世代のUターン帰農により生産者、栽培面積が増えた他、製糖工場の働きかけもあって30代の若者がさとうきび栽培を始めるなど、若い生産者の増加も見られる。また、新工場の稼働にあわせて、トラクターや収穫作業を軽減する刈り倒し機などの機械の導入が始まるなど、機械化にも取り組んでいる。



写真4 島の経済の柱 さとうきび

#### (2) さとうきび農業を通じた都市と農村との交流

小浜集落では、手刈りによる収穫作業も依然として多く、重労働となっていることから、製糖工場が収穫作業の支援のため、「きび刈り援農隊」と称して毎年20名程度を雇用している。参加者は製糖工場内施設で宿泊し、島民との交流を行いながら、約2か月間収穫作業を行っている。

援農隊の半数以上はリピーターであり、家族同様に接してくれる生産者との心のふれあいを楽しみにしており、中には1年以上島に住み着いた人や、定住してさとうきび栽培を始めた人もおり、さとうきび農業を通じた都市と農村の交流により生まれた新たな側面であると言える。



写真5 きび刈り援農隊と刈り倒し機

また、製糖工場のきび刈り援農隊とは別に、平成7年に民宿経営者が、さとうきび収穫時の労働不足の解消と都市と農村の交流を図ることを目的に、体験型農業として「キビ刈り援農塾」を始めた。きび刈り援農隊と同じく、都市と農村の交流に大きく貢献し、平成12年度には国土庁の第15回農村アメニティコンクールで優秀賞を受賞している。

### (3) 畜産・耕畜連携

復帰前後の過疎化で農地が荒廃する中で、住民から、“住民主体の牧場経営を行ったらどうか”と提案があったことを契機に、小浜集落における畜産が始まった。

今では、畜産農家のほとんどがさとうきびとの複合経営を行っており、さとうきびの梢頭部しょうとうを牛に給餌している他、今後、牛糞堆肥の利用促進など、副産物の一層の活用方法についても検討が進められている。

畜産農家数は現在26戸と、平成10年に比べて約半数に減ったが、1戸当たりの飼養頭数は増加し、飼養頭数全体では大きな変動はない。八重山地域の他の離島では飼養頭数が減少している中で、小浜島では飼養頭数が安定しており、年間のセリ販売額は105百万千円と平成10年の約1.3倍になるなど、八重山地域の他の離島と比べても安定した畜産経営を行っており、今ではさとうきびと並んで地域経済を支える柱となっている。

### (4) ゴマ栽培によるさとうきび農家の所得向上と赤土流出軽減化

キビ刈り援農塾により、県外からの多くの人との交流をきっかけにゴマ栽培のアイデアが生まれ、平成8年からゴマ栽培が始まった。小浜島のさとうきびは夏植えが中心で、1～3月に収穫した後は次の定植まで裸地状態となり、梅雨時期になると表土の流出が起これり水質汚濁「赤土流出」の一因となっていたが、その期間にゴマを栽培することにより裸地状態を解消することができ、表土の流出が軽減されるといった効果もある。この取組により、平成12年度に農林水産省の第6回環境保全型農業推進コンクールにおいて奨励賞を受賞している。

また、さとうきびとゴマを輪作することで新たな販売商品となり、さとうきび農家の所得向上にも期待されている。

### (5) 小浜大豆の復活と児童・生徒との連携

小浜集落は、昔は大豆(小浜大豆)の栽培が盛んで、豆腐や味噌、醤油の原料として使われていた。外国産大豆の輸入とさとうきび作の拡大などで大豆の栽培は途絶えていたが、平成14年に定年退職後Uターン就農した農家が約40年ぶりに小浜大豆の栽培を復活させた。



写真6 小浜大豆

平成22年からは、八重山農林高校と連携して大豆を使った地域おこしに取り組んでおり、小浜集落のクモーマミ生産保存会が大豆の種子を提供し、八重山農林高校で小浜大豆の増産や、昔ながらの醤油や豆腐、納豆など特産品作りのプロジェクト活動を行っている。また、平成22年には「宇宙大豆プロジェクト」に小浜大豆が選ばれ、宇宙から帰還した大豆は小浜小中学校で保存されるなど、次代を担う子供たちの地域農業や食育への関心の高まりに一役買っている。

## 3. 生活・環境整備面における特徴

### (1) 何百年も継承してきた伝統芸能は集落の誇り

小浜集落の伝統芸能は、親から子へ、子から孫へと何百年にもわたって継承されており、人々の誇りである。価値観の多様化、個を重視する現代社会において、伝統文化を守り継承し続けることは非常に至難だが、こうした過去から連綿と受け継いできた伝統文化を継承していくことは、住民の連帯感を高める場にもなっている。この経験を通して醸成された地元への愛着感に基づいた地域コミュニティの強さは、たとえ難題があろうとも立ち向かう力となり、形には見えない財産となって集落に恩恵をもたらしている。

### (2) 「ウカーいなほ友の会」による田園風景の復活

小浜島は、旧藩時代から稲が栽培されており、集落の祭は稲・粟など五穀を軸に形成されているなど、その根本は稲作儀礼であり、集落の伝統行事は農耕儀礼と深く関わってきた。

しかし、米が栽培されなくなり休耕田が目立つようになる中、数年前から団塊世代が島に戻り、「ウカーいなほ友の会」を組織して休耕田で米作りを始めた。メンバーは現在5名で、夕方になるとウカー(地名)にある一本松に人々が集い、先代の方々とコミュニケーションを取りながら米作りの技術を教わり、稲作を通して伝統文化の継承と発展、昔の美しい田園風景の再現を目的に取り組んでいる。